

創作

渦 卷

理二ノ一 工 藤 洋

動いてゐるのかゝるないのか分らないやうな速さであつたが向ふの景色はどん／＼變化していつた。淡い連絡船の震動が足下から傳はつてきて乗つてゐる人を皆小刻みに震はせてゐる。新聞を讀んでゐる人も話してゐる人も一人で考へ込んでゐる人も皆一樣に肩が震えてゐるのが何だか滑稽に見えて仕方がはない程有三の心は浮き／＼してゐた。前に居るハンチングを被つた商人らしい男は時々讀んでゐる雑誌から目をあげてその度に執拗な目付で有三を見た。有三は何か氣になつてゆるんだ筋肉をひきしめて一寸むつかしい顔をしてみせるのだが、又何時の間には微笑んでゐた。商人の横に産つてゐる三人の女學生はさつきから映畫雜誌に見入つて嘆聲を擧げたり貶したりしてゐたし、有三の横の紳士は聲をだして新聞を讀んでゐた。青い空、海、さはやかな潮の香、そんなものは有三にはみんな樂しかつた。トランクを残して船室の外に出た有三は誰も見えないならば目をつぶつて二三度廻轉してでも見たいやうな氣持になつた。一寸見ればどつちが門司かどつちが下關か分らぬ程よく似てゐるこれ等の町は、むせかへるやうな海の反射にまたゝいて、汽船のまのびした汽笛や船首に碎ける波の音や船の通つた後の白い波やはうつとりとして手足がしびれるやうな感じを有三に與へた。

43. 近頃有三は、どん／＼感激性のなくなつてくる若さに對するとりかへしのつかない悔恨や、見榮を張るやうな純眞性が無くなつて頭からものを馬鹿にするやうになつてゆく自分といふものが悲しいやうな氣がした。讀書だ、思索だ、ストームだと馬鹿騒ぎをした罪のない時がなつかしかつた。どんなつまらぬ本を讀んでも感激してゐた時が羨しかつた。此頃は本を讀んで感激してもすぐ冷たい懷疑的な氣持がおこつてくるのである。結局虚疑と偽善の塊りじやないか、——さう思

ふとそれに感激した自分の馬鹿さ加減に愛想がつきるやうな氣がする。又一面そんな考へをおこす事が一体いゝ事か悪い事か、有三にはそれが分らないやうな氣がする。物事の善惡の判断がだん／＼つけ難くなつてきた。自分の思想が何か一種の變態的な、狂じみたものになつてくるのに、底知れないやうな不安を感じた。よく云はれる青白きインテリに自分もなるんじやないか。誰かゞ知性とはもつて逞しいものだと言つた。一度は青白きインテリになつてそれから又變つていくんじやないか。有三はそんな事も考へてみた。しかし自分の考への中には、幾分厭世的な、それでゐて樂天的な、御都合主義的なものがあるやうな氣がして、それを自分の過去と結びつけて考へるとき、幾分暗い氣持になつた。結局かうして一時的に旅行にでも出る時が一番氣が安まつて樂しかつた。

午後の四時半頃下關に著いた。改札を出て、若し買へるならばと思つて特急券賣場の長い列に加はつた。前の人の進む度に一步々其の後について後五六人位になつた時、赤ん坊を負つた四十位の女が不意に有三の所へやつてきて、

「兄さん、お願ひです。私を一寸入れてください。これを買はないと本當に困ります。今から後へ並んでも賣切れて終ひますから。兄さん、どうか。」と有三の腕に手をかけた。

中年の女に特有な押し強さを表はすやうな目付きを見ると同情よりも家ろ反撥心が起つてきた。一寸同情されるとすぐぐつげ上るし、自分を可哀想に思はないかと云ふやうな、又同情されるのが當然だと云ふやうな様子が厭だつたし、學生の自分を甘くみてゐるのだらうと思ふと癪にさはつた。貴女を入れたら矢張り一人買へぬ人が出てくるんだからと云つて斷つた。そしてうるさくなつたので知らぬふりをした。女はしばらくしてあきらめたやうにして行つてしまつた。

「櫻」を手に入れると有三はそゝくさに其場を抜け出した。いつも普通の急行に乗るんだけど一寸金があるとすぐ要らぬ事に使つてしまひたがる自分の癖に苦笑して時計をみるとまだ大分時間があつた。トランクを置いて外へ出るとさつき女の人が列の後に並んでのび上るやうにして前を見て心配さうにそわ／＼してゐた。有三は顔を合せたくなかつたので顔を隠すやうにして通り抜けた。それな事にかゝはりたくないといふやうな恰好でそつぽを向いて知らぬ顔をしてゐた、自分の横に並んでゐた人達を思ひだした。あの時側の人が入れてやれと云はぬにしてもそれを許すやうな態度をしたら入られてやつたんだがと思ひ、そんな氣持を封じさせるのは結局あの女が悪いんだと辯解したりした。そんな事に案外小心な有三は一寸暗い氣持になつて驛の前の道を歩き出した。

山陽のグリルで夕食をすますとそのまゝ町の方へ歩き出した。有三は驛の附近の雑沓の中をかうして歩くのが好きであつた。二三人の家族らしい人が特急券はどうの寢臺がいゝのと云つてゐるのや、トランクを兩手に提げて急がしさう歩いてゐるのや、驛員に何か一生懸命に尋ねてゐる人々の間を、さも用あり氣にぐる／＼廻つてみるのは何か面白かつた。有三はいかにも旅行者だと云ふやうな、一種の誇りみたいなものを抱きながら一軒々々素見して歩いた。果物屋、飲食店、小間物屋、そんなものが雑多にならんで、どこからとなく匂つてくる潮の香の中にぞろ／＼歩いてゐる人々の間にあつて、彼は云ひ知れぬ孤獨を感じた。それは寧ろ楽しい孤獨であつた。旅のみ味はひ得るやせぬ孤獨だつた。それは人戀しさの孤獨とは異つてゐたし、その孤獨さを破らうといふ氣は起らなかつた。一軒の料理店で名物の天婦羅を食ふと一寸時計をのぞき込んで驛に引返した。構内にはどつしりと「櫻」が横たはつてゐた。旅客は案外少なかつた。眞中邊に位置を占めた有三は、荷物を棚の上にあげるとマントを引きかぶつて寝て終つた。

有三は小さい時からあつちこつち歩いてゐた。臺灣に三年、長崎に四年、東京に四年居つたのが一番永く滞在した方だつた。その他小さいのも數へると何回移つたか分らないし、小さい時の事で覚えてゐなかつた。ひどい時は三ヶ月位で移つた時もあつた。父が官吏をしてゐてその爲であつた。その間で有三が一番よく印象に残つてゐるのは小學校の二年から五年までを過した長崎の時代であつた。そこで有三は——父母を失つたのである。

父の家は文房具屋だつた。今でも有三は店に積まれてある製圖用器や三角定規や其の頃では珍らしかつた紙挟み等を覚えてゐる。その店は祖父が無一文で長崎に出て來て腕一本で作りあげた店であり、父は祖父の末子の一人息子で三人の姉があつた。關西のある私立の大學を出て、下級官吏として初めて赴任したのは朝鮮であつた。それから臺灣に移つた。有三と彼の妹はそこで生れたのである。臺灣で八年間位暮した父は、一生うだつの上らぬ下級官吏生活と、長年の植民地的な索漠とした生活にすっかり厭になつて、生來の意志の弱さも加はつてもう少しと云ふ所で官吏を止め、祖父がまだ健在である長崎の家に歸つて商人の生活に入つてしまつた。有三は其時小學校の二年で母と妹と一諸に長崎へやつてきた。祖父は前から父に官吏を止めて實直な商人になるやうに進めてゐたのだが我儘な父は仲々承知しなかつた。年來の願が叶つてほつとしたせいでもあらう、祖父は有三達が歸つて半年許立つとほつくり死んでいつた。祖父が死ぬと父は文房具屋を

止めて額縁屋を始めた。額縁屋と云つても額縁だけでなく色々な船の寫眞を集めて賣る方が主だつた。船員達が休暇で歸るやうな時、自分の船の寫眞を彼等の家へ持つて歸つて行くだらうと云ふ思惑は成功した。船の休暇が重なりでもすると船員達がいつばい集つて小さな有事も手傳ひせねばならぬ程だつた。その頃そんな商賣をする者は殆んど彼の家位だつたのでだん／＼有名になつた。乗船中の船員からも、手紙が來て寫眞を彼等の家へ送くる事を頼んでくるやうになり、時にはそれ等の註文の包みで部屋が一杯になつて寐る所がないやうな事もあつた。しかし類似の店が其處此處に出來てきて一時は繁昌した店も少しづゝ衰へてきた。有三の父は學生時代繪に凝つた事があり、相當な畫家の友人も大分ゐた。それ等の傳手を求めて繪を集めるやうになり、父の主宰で百貨店等に展覽會を開くやうにもなつた。そんな事で又少し盛り返したりしてゐた。官吏生活の決まつた俸給から思はぬ儲けのある商人になつた有三の父は遊ぶことを覺えてしまつた。夕飯も食はずにぶらりと出掛けて夜の二時か三時頃に歸つてくる事が多くなつた。酒臭い息を吐いて階段をきませながら上つてくる足音を聞く度に有三はひそかに目を覺した。小さい子供に添乳しながら待つてゐた氣の弱い母がおづ／＼とたしなめるのを、父は酔つた聲で叱りつけて大きな音を立て、寢床に例れ、すぐ躰をかいて寝てしまふ。黙つて靜かに涙を拭いて子供を揺つてゐる母を見ると、有三は母の氣の弱さに寧ろ腹が立つた。母が可哀想になつて憤りながらも尙ほ／＼涙を流してゐた。父の放蕩がだん／＼ひどくなると反對に店の方はだん／＼さびれていつた。父は又商賣を換へて今度は看板屋になつた。子供の有三にしてみてもこれは不思議な變化だつたし今でもどうして父が看板屋になつたか分らなかつた。父はたしかに鋭い眼を持つてゐたが飽き易くて一寸の失敗にすぐ挫けてしまふ性質らしかつた。何かだん／＼變つてゆく。家がだん／＼衰へてゆく。しかしまだ子供である有三はあんまり深くそんな事を考へてはゐなかつた。看板屋になると今までの店の中の庭のセメントが剝がれて板敷きになつた。有三は板敷の上を下駄で歩くとかた／＼音がするのが面白いので友達を集めて鬼ゴツコをしたりしては父から大聲で叱られてゐた。父は職工が著るやうな上衣とズボンのつゞいたペンキの一杯ついでゐる服を著て看板を書いており、省三も時々簡單な手傳等させられた。性來の好みからか父は前よりは大分熱心に家業に勵んでゐたが相變らず放蕩は止まなかつた。

其頃から有三の母は病氣になつた。そして病氣で弱つてゐる時に子供を生んだ。これが悪かつたのは云ふまでもなかつたそれからどつと床に著いてしまつた。看護婦が高くさ／＼上げてゐる瓶から液がだん／＼滅つてゆく食鹽注射を見てゐると

有三はとても恐ろしくなつて父の膝に顔を當て、べそをかいてゐた。發病から一週間位経つて有三が學校から歸つてくると、母は亂れ髪を搔き上げながら床の上に座つてゐた。有三はもうよくなつたんだらうと思ひ嬉しくなて學校の宿題を見せたり母の前で復習したりしてゐたが今まで靜かに聞いてゐた母が低い呻き聲を上げ眼を白くさせて手足を痙攣させながら上向きにひつくり返つた。有三はびつくりして大聲で泣きながら、「父ちゃん！ 父ちゃん！」とさげんだ。すぐ醫者が呼ばれた。手足をぶる／＼痙攣させてゐる母を家中の者が一生懸命に押へてゐなければならなかつた。日に何回となくこの發作が起つた。しつかり指を握りしめていくら押へても尙ぶる／＼震へてゐる母の手にとりすがつて、誰か他の人のやうになつた母の顔をみながら有三は涙をぼろ／＼こぼした。母方の祖母が手傳ひに來てゐたが、母が最初に倒れた方を枕にして寝てゐるのを北に當つてゐるので縁起が悪いと云つて聞かなかつた。そして家の者が止めるのも聞かず發作の際をみて無理に方向を變へてしまつた。その晩一つきりひどい發作がやつとをさまつたと思ふと、其儘ぼつくりと嘔みだしたに死んでいつた。父もさすがに涙を落したが有三達は大聲をあげて泣きだした。小さな妹は何が悲しいのか分らないらしかつたが家中の者が泣くので遂に泣出してしまつた。自分が生れた爲に母を殺した事もしらない生れたばかりの赤ん坊の泣き聲が其の間に空にひびきわたつた。有三は母が死んだといふ事は少しも悲しくはなかつた。唯自分の前に寝てゐる母がもう再び眼を開けて呉れない、話をして呉れない、自分に微笑んでも呉れない、さう思ふと有三は無性に悲しかつた。結局それは死といふものに對する悲しみにすぎないかもしれない。しかし幼ない有三の心にとつては母がもう永久に動かないといふ事だけが悲しかつた。

死んだ母の妹、即ち有三達の伯母も來合てゐたが、有三は其の人には初めてであつた。その翌日の事だつたか死んだ母の事に氣を取られて皆生れたばかりでまだ名前も付けられていない赤ん坊の事は忘れてゐた。伯母は赤ん坊に氣が付いて「まあ、この赤ちゃんも可哀想に、お母ちゃんが死んだのも知らずに！」

と云つて涙ぐみながら抱きかかへようとして急に悲鳴をあげた。赤ん坊は死んでゐた。綿布圍をま深かに著せてあつたが誰もかまひ手がなかつた爲それが鼻に當り窒息して何時の間にか死んでしまつてゐた。まだ顔もはつきり見てもゐない妹の死は、有三に悲しみの感情はあまり起させなかつた。それよりも人間はすぐ死ぬものだといふ恐怖の念を興へた。死んだら母の所へ行ける——そんなことは有三にはたゞの話しにすぎない。唯死といふものが無精に恐ろしかつた。それ

は、それによつて有三の母に對する愛情がどうかうのと云ふ可きものではなかつた。

長崎市の北の方の田舎に、有三達が山田の叔父ちゃんと呼んでゐた遠縁に當る叔父が住んでゐたが、有三達の母が白い帷子を著せられ、手を合せられ、その手の間にほんの此の世に十日と生きてゐなかつた赤ん坊を母親らしく抱かせられて棺桶の中に入れられる時、

「ほんに、かはられるもんならかはつとじやけど。」

と云ひながら子供のやうに顔に手をあてゝ泣きだした。山田の叔父ちゃんは何時も冗談ばかり云つて皆を笑はせてゐたため聲をあげて泣きだすのが異様に見えた。それにつられて又皆一しきりすゝり泣きをした。

また店が額縁屋であつた頃、有三達が店の前で遊んでゐると四十位の男のお客が来て母が挨拶すると帳面に何か書いたものを見せた。母は直ぐうなづいて紙と鉛筆を持つてきた。何かその人は耳が悪いらしく他の人には聞えないやうな小さな聲をだしてゐた。

「コレ位の金縁ハアリマセンカ？」とお客は手を舉げてみせた。

「ゴザイマセン」

「デハコレ位ノハ？」

こんな筆談が大分つゞいた。有三は後でせがんでその紙を見せて貰つたので大体覚えてゐた。お客はどうも求める品が無くて歸つて行つたが、母はその時思はずすみませんと口で小さく云つてにっこり微笑んだが、事柄が特異だつたせいか有三はこの事をよく覚えてゐた。そして母がすみませんと云つた微笑が奇妙な程頭に残つてゐる。この事は一生忘れなだらうと有三は思つた。父の放蕩が始まつて以來母の顔はとても暗くなりめつたに笑顔をみせなくなつた。それが有三には大變さびしかつた。母の笑顔をみたい一心で有三は母の嬉しがりさうな事をいろ／＼とやつてみた。何を云つても母は生返事ばかりしてとり合ないのでどう／＼じれて泣きだした事もあつた。そんなくだらない事を有三は葬式の自動車の中で考へてゐた。そして獨り涙ぐんでゐた。妹達は自動車に乗れるのが嬉しくて騒いでゐた。それを有三は叱りつけたりしてゐた。母が病氣になつた頃から有三達の家の前に電車が通ることになつて家を前の方一間ばかり引込めることになつた。葬式等でごた／＼してゐる間に他の家は皆工事に取掛つて残つてゐるのは有三の家だけだつた。又丁度町角にあつた

ので二倍も手間が掛り、間口だけ廣くつて奥行きはなかつた家はます／＼變な恰好になつた。父はその序に今度は家を三つに切つて下を人に借し、有三達は二階に住ふやうにした。父の放蕩はさすがに前のやうではなかつたが、それでも夜等はすぐ裏に當る銀行へ行つて宿直員と毎晩二時か三時頃迄麻雀をやつており、時には人數が足りないといつて有三迄引張つて行つたりしてゐた。その翌日等は晝過ぎ迄ぐつすり寐てゐた。

母が死んでから五ヶ月位過ぎた或日學校に居る有三に父が突然面會に來た。

「有三、道具をしまつて父ちゃんと一緒に來い。先生には云つてある。」

「何處行くの父ちゃん。」

「家をなほるんだ。」

家をなほるなら何にも學校を早退けして行かなくてもいゝだらうと思つたが、恐ろしかつたので黙つてついて行つた。今度の家はすつと山手の新開地にあつた。道路にはまだ抗夫が残つて石をつめたりしてゐた。一寸とした門もあり、玄關も大きな庭もあつた。荷物は何時の間にか運び込まれてあつた。有三達の部屋は玄關脇の六疊で前に比べたら明るいし廣くもあつたので嬉しかつた。妹と遊んでゐると父の呼ぶ聲がした。

「有三、一寸來い。」

父の側に見知らぬ女が座つてゐた。

「有三、お前母ちゃんがゐなくてさびしかつたらう。新しい母ちゃんだ。」

「さあ、有ちゃん。こつちいらつしやう。」

父が有三を引寄せて其の女の人の膝にのせた。其の人の着物は白粉臭かつた。そして其の人の顔はいやに白かつた。有三は何か不潔なものを感じて逃げてしまつた。門の横には上の字は忘れたが何とか御用達といふ看板が懸つてゐた。小學校は矢張り前の所だつたし仲良しの友達が近所にゐたので毎日有三の新しい家の大きな庭は子供の遊び場所になつた。樹一本も植えてなく、でこぼこしてよく地馴しもしてないこの庭は子供には返つて面白かつた。有三は新しい母の事はあまり考へもしなかつた。母ちゃんと呼んでゐたが、たゞ伯母さんと呼んでゐたかそんな事も忘れてしまつた。有三にとつては、この新しい母は居つても居らなくても何ともなかつたし、女中位にしか考へてゐなかつた。たゞ小さい妹が何にも

知らず懐いてゐるのがいま／＼しかつた。父と新しい母は有三が學校から歸る頃は、大抵ゐなかつた。そして六時か七時頃歸つてくると冷たい飯に變なものを添えて大儀さうに有三と妹に食はして呉れた。日曜等は殊に慘めだつた。父達は十時頃でないと起きなかつた。妹と二人で飯を炊いてゐるとやつと母が起きてぶつ／＼云ひながら飯を炊いてくれた。晝食は妹と二人で用意した。不器用な手付で茶碗を運び、戸棚を隅まで探してやつと花がつを、の袋を見付け出していつもそれを食ふ事にしてゐた。前の家では婆やが居つてちやんと美味しいものを食はして呉れたのにと思ふと何だか悲しくなつて冷たい飯に水をぶつかけて急いでおきこんでゐた。新しい母に反感をもつといふやうな、そんな早熟な考へは起らなかつた。勿論心から母に親しむことはなかつたけれどもそれかといつて變に避けたり等はしなかつた。夜に父と一緒に酒を飲んでふざけたりしてゐるのを見ても、前の家の陰氣なのに比べて返つて面白いとさへ思つてゐた。そして今度の母ちやんが何か普通の人ではないらしいことが有三にもうす／＼分りかけてきた。十日に一邊位頭の禿た人がやつてきて父と聲高に喧嘩みたいに話してゐたが、或時隣で煙草をふかしながら聞いてゐる母に、あの人は誰と尋ねてみると家主さんだといふことであつた。

新しい家に移つて三ヶ月許立つた或日、有三が學校から歸ると机の上に紙がのつてゐた。

父ちやんが病氣だからR病院にお出でなさい。

と母の綺麗な字で書いてあつた。すぐ有三は病院に行つた。玄關の所で妹と會つた。二人で病室に入つて行くと、父は鐵の格子の曲つたやうなものを休の上に乗せその上に毛布を着て寢臺の上に寢てゐた。

「あゝ有三か。父ちやんは手術をしてな、……………」と云ひかけると母が

「あんた、黙つてらつしやい」といつた。

其の夜は病院に泊つた。それから二三日たつて福岡から伯母がやつてきた。この人は父の姉にあたる人であつた。有三と妹が父のいひつけで驛迄出迎へに行くと、伯母は、かはいさうに、かはいさうに、と云つて有三達の頭を撫で、呉れた。その足ですぐ病院へ行つた。母は煙たさうに伯母に挨拶して部屋を出て行つた。父は伯母から何か云はれてゐるらしかつた。有三達は伯母と一緒に家へ歸つた。

「伯母さん。父ちやんは何の病氣？」



「盲腸炎と云ふのよ。どうも手遅れらしいけど。でもお前達も可哀想にね。靜さん（死んだ母の名）が亡くなつたと思つたら今度は父ちゃんが病氣になるし、それにあんな變な女を、……あ、それよりもお前達おなかが空いたでせう。」  
 碌なものも食べてゐない有三には、食堂の親子丼がどんなに美味しかつたらう。家へ歸つてしばらくたつと病院から急な報せがあつた。有三と伯母はすぐ病院へかけつけた。

父はもう死んでゐた。父の空な、今にも笑ひださうにして死んでゐる顔をみても有三は少しも悲しくなかつた。父は唇を少し開けてゐたが看護婦がいくら手で閉じようとしても又すぐ開いた。有三はそれが面白いとさへ感じられた。母は泣きはらしたまつかな眼をしてうつ向いて座つてゐたし、伯母は齒をくひしばつて立ちながら涙をぼろ／＼流してゐた。病院の手配ですぐ葬儀屋がやつてきた。そして父を抱き起した時父の白い眼が開いたので有三はびつくりした。葬儀屋は棺桶の中へ入れるため父の体中の骨を折り始めた。手の指の骨なんかはすぐぼき／＼と折れた。しかし葬儀屋が父の足を肩にかついで足の付根の骨を折り始めた時にはさすがに恐ろしくなつて思はず伯母の胸に頭を押しあてた。あんなにされても父はもう何とも出來ないと思ふと、始めて父の死が現實に迫つてきた。しかし相變らす悲しいといふ氣は毛頭起らなかつた。

父の葬式がすむと、妹は母方の里へ引取られ、有三は福岡の叔母の所へ行くことになつた。妹に別れる悲しみなんか少しも感ぜず、それよりも汽車に乗れる嬉しさの方が強かつた。福岡に二年許居ると叔母一家が東京へ移ることになり、有三も一緒に東京へ行つた。

何時の間に動か出したのであらう、リズムミカルな響きと快よい速度感にうと／＼してゐた有三はふと眼を覺した。レールのつなぎ目の所を通るときの汽車の音と機關車の蒸氣の音との間の一種の音楽的な諧律に聞き入りながら、有三は今まで何十邊何百邊さうしたかも知れない過去の想ひ出の中にうつり溶け込んでゐた。車内の暑さでくもつてゐる窓硝子に人々が眠つてゐるさまが幻のように寫つてゐる。有三はそれを眺めながらぼんやり考へ込んだ。

あれから——父が死んで伯母に連れられ、伯母の家庭の一員となつてから、中學校を卒業し上の學校へ行くやうになる迄。

有三は唯一人だつた。……たゞ一人であることは何と嬉しいさつぱりしたことか。伯母との間は伯母の家に居るといふだけで、たゞ最も親しい素人下宿みたいな關係だけであつた。有三の心は何時にも孤獨であつた。伯母は勿論有三に對して普通の甥以上の愛情を抱いてゐるであらう。しかし有三はそんなに思ひたくなかつた。そんな風に考へるのは死んだ母を冒瀆するやうな氣がした。死んだ母の愛情の中に生きてゐたかつた。伯母はたゞ親身に自分の身のまはりの世話をしてくれ、自分はそれに心から感謝してゐるにすぎないと考へたかつたし、又それで十分であつた。たゞ時々たまらなく寂しい氣持になつてくる。何か心から自分が愛してみたいものが慾しくなつてくる。伯父とか伯母とかそんな肩の凝る人でなくたゞお互ひに愛し愛されたいものが慾しくなつてくる。有三はそんな時にあの死んだ妹が自分の側にゐてくれたらと思ふのであつた。妹は朝子と云つたが父が死んで以來本當に唯一人の肉身だつた。母の里である佐賀のすつと田舎の方に住んでゐた。一年に一邊年賀狀を取交すだけでその他には手紙も出さなかつたし會ふ機會もなかつた。有三が中學の一年の時妹が引取られた家から電報が來た。

アサコキトクスグ コイ

有三は其晩伯母と下關行の急行にのつた。涙脆い伯母はもう眼をまつかにしてゐた。有三は悲しくもなんともなかつた。小さい時からの不幸の打續きに有三の心には滅多な事では涙を流さぬ習性がついてしまつたのだらうか。伯母がしきりに悲しい顔をしてゐるので有三も仕方なく暗い顔をしてみせた。下關で乗換へ鳥栖で乗換へもう一つ支線に乗換へてやつと妹の居る町についた。古い傳統に生きてゐるやうな町で、陶器の製造は今もなか／＼盛であつた。驛前の埃つぽい街並の中にも陶器屋は目立つて多かつた。町の真中を河が流れてゐる。その河には近代的なコンクリトの橋等は少しもなく皆古風な木橋で中には赤い擬寶珠の澤山ついた橋もあつた。その擬寶珠のついた橋のすぐ袂に妹が居る家はあつた。二年ぶりに會ふ妹はもう聲も掛けて呉れなかつた。祖母は有三をみるといきなり膝に抱きついてきて泣きだした。有三は困つてしまつた。丁度其の日は何かの祭の日で河にはお神輿が二つ澤山の若い人々の裸体の肩の上にもまれてゐた。早くしないと祭が見られなくなるが、――有三はそんな事を考へてゐた。しかし祖母の涙が有三の洋服のぼたんにふりかゝつてゐるのを見てゐる中に、とう／＼涙が出てしまつた。しかし翌日はもう河へ行つて蝦を取つてゐた。殺生はいけなないと叱られても取つてしまつて逃がすからと云つて取つた蝦は魚釣りに來てゐる近附の子供にやつてしまつた。そして一週間後に

は眞黒になつた有三は再び汽車にのつた。一週間避暑に來たやうなものだつた。

東京に歸ると叔母は有三の前に座らせて、妹はなくなつたんだしいよ〜お前獨りになつたんだから、身体に氣を付けてお前の家を繼がなくちやならぬと例の御説教を始めた。妹が死んだ、妹が死んだ。それを云はれる度に有三は叔母に對し無性に腹が立つた。妹は俺の妹だ。伯母がなんでつべこべ御節介をするんだと思つた。有三の心には、自分では氣が付かぬ妹の死に對する悲しみや、死んだ母に對する遺場のない憤慢にいろ〜理窟をつけて伯母や伯父に對する嫌惡の情が起つてきた。その口には出せぬ、何と説明していか分らない嫌惡の情はそれからだん〜つので行つた。中學を卒業して上の學校に入る頃は、自分の心をつつて呉れるものは世界中誰一人もゐないだらう等と思つて悲しくなつた。有三は自分の心をつつてくれる自分と同じ境遇の人がほしかつた。かう考へると妹の死といふことが無精に悲しくなつてくる。妹も小さい胸にこんな憤慢を抱きながら死んでいつたんじやないかと思ふと有三は妹が可愛想でならなかつた。母が死んで父が新しい家へ引越し新しい母をむかへた時も妹だけは俺が守つてやるといふ氣持になつてゐたのを有三は寂しく思ひ出す。やつと花が、つをを見付けだして妹と二人で御飯を食べたやうなことがやるせない位に胸を打つ。衝で、妹が生きてゐたらこの位になるだらうと思はれるやうな可愛い女學生に會ふと、抱きしめてやりたいやうな衝動に驅られる。それは異性に對するほのかな憧憬に似た氣持が交つてゐたかも知れない。しかしそれは有三にとつては肉身に對する本能的な慾求であつた。死んでから五年もたつたものを慕ふ氣持がいつほりのない純な氣持であるとして有三は思つた。

父の死——それは何でもなかつた。母の死——それは最初はとても悲しかつた。しかし時間がたつにつれだん〜薄らいで行つた。後では自分にも母といふものがあつたんだと、まるで他人事のやうに考へるさうになつた。初めは其の氣持は自分でも可笑しかつたが後ではごく當り前の事になつた。妹に對する思慕はそれにもまして高まつてゐた。有三はかう考へたこともある。それは自分の心が少年から青年へと移つて行つたせいじやなからうか、愛される人よりも愛するものが愈しくなつたんじやないか。さういへば、夜寝られない様な時、父母に對する身を切られるやうな切ない氣持にさめ〜と枕を濡らす陶酔感近頃は少しも感じなくなつてきた。誰一人身寄りもない索漠とした孤獨感——最初はそれを反つて氣安いやうに思つたが、それは矢張り自分の心を偽つてゐたのだと氣が付いた。妹を戀ひ慕ふのに幾分悲壯的な浪漫的な氣分を満喫したいのか。そんな氣持も幾分はあるかもしれぬが、安價なセンチメンタリズムと一概に貶されぬもの

があつた。

有三は自分に人並でないやうな所があるのを感じる。又人一倍發達した鋭敏な感情を持つてゐるやうにも思ふ。だん／＼自分自身のうちに沈潜して行つて、それを自分でどうともすることができないものを感じる。自分と他人との距てがだん／＼深くなつてゆき、又それとさらに誇張して考へてゐる。有三の過去は恐るべき過去だつた。救ふべからざる不可思議な力で有三をとらへてゐた。暗い、むしろ冷酷な眼で自分の過去のことを觀察し自分でかぶせてゐた虚飾の冠を一枚々々剥ぎとり、その底にかくれてゐるありのまゝの自分の心理状態をたどつてゆくと、何か凜然たるものを感じる。放蕩者の父、弱いみじめなしかし有三にとつてはあくまでも慕はしい母、醜惡な新しい母へと移つて行つた少年時代の生活。この傷つけられた不幸な魂を如何にして救済すべきであらうか。これから先の人生を矢張りこの冷たい冷たい眼で見續けてゆきはしないだらうか。今まで何度も／＼考へて解決できなかった惱みにつきあたる。

有三はデツキに立つてみた。青い信號燈が明滅してゐる。どこかの河にかゝつたのだらう。汽車がもの寂しい音をたて、鐵橋を渡つてゆく。目の前に鐵橋の鐵の柱がちら／＼する。眞黒な山、青い島、林、人家、そんなものがちら／＼する。しばらくするとそれが黒い渦をまき始めたやうに見える。目の周圍に尾をひいた小さな光がとんでゐるやうな氣がする。汽車の音が聞えなくなり丁度夏の日中の蟬の聲のやうな音が頭一ぱいに／＼／＼ひびいてくる。その底に何か理性的なさ／＼やきともつかぬものが聞えてくる。有三はデツキの把手を握つてゐる手が自然にゆるくなるのに氣が付いてはつと握りしめた。